大学における沖縄戦授業実践

― アブチラガマにおけるロールプレーの試み ―

里 井 洋 一 *

はじめに

1996 年 4 月、高嶋伸欣先生が琉球大学大学院教育研究科教科教育専攻社会科教育専修の柱である社会科教育学の教授および教育学部社会科学科（現社会科教育教室）社会科教育担当の教授として琉球大学に赴任された。

高嶋先生が赴任されたその年教育学部社会科学科は中学校教員養成課程の学生向けのカリキュラム改革を行い、中学校教員養成課程社会科の独自科目として社会科教育調査という科目を新設した年であった。社会科教育調査は、中学校教員養成課程社会科を専攻する 2 年次学生の履修指導上の必修科目で、小学校教員養成社会科を専修する学生は選択科目として位置づけた。指導は学科目社会科教育担当教授の高嶋先生と助教授里井が行うことにすでに決まっていて、高嶋先生とは赴任前に事前に了承していただいていた。ただ事前打ち合わせの中で、高嶋先生は沖縄の基地と戦跡を実際に巡ることは、沖縄の社会科教員として必須の体験であると強調され、この調査科目の中に必ず基地と戦跡巡りを組み込みことにした。

初年度の 1996 年度社会科教育調査は、文部省からカリキュラム改革プロジェクトの資金を得て、竹富町小学校社会科副読本の改訂が予定されていた[1)]。この年の基地と戦跡巡りは基地が読谷村、戦跡が首里・アブチラガマ・摩文仁を巡るコースで、院生と社会科教育ゼミの 4 年生が事前に学習した地点を説明するという方法をとった。

1997 年度は、高嶋先生とが発案し、前年度から社会科教育学科目として計画していた共通教育に沖縄の基地と戦跡 I と II という授業が開始した。この年の 2 年次に対する調査授業は名護市の小学校用社会科副読本を作成した。2 年次を指導する院生として、兼松力（当時黒島

* 琉球大学 教育学部 社会科教育講座

小中教諭）先生も参加した。この年の基地と戦跡巡りも前年度と同じコースで同じような方法で行われた。

1998 年度は沖縄県立博物館と共同でサツマイモづくり実践を行った。この調査で行われた戦跡巡りは例年と異なるものとなった。それは、当時 2 年次であった KT さんの戦跡調査への違和感表明から始まった。kT さんは、彼が経験した沖縄戦学習は悲惨さをおしつけるものであり、怖さを増幅するものとしてガマ（壕）体験をしてきたので、嫌な気分になるガマ（壕）へは絶対行きたくないと主張した。このような中、2 年生を指導する立場であった大学院生伊達望さんは、それまで行ってきたサツマイモづくり実践が学生の創意に依拠した実践であったため、従来の戦跡を説明する授業をこの戦跡授業においても想定していなかった。この伊達望さんの勘違いこそ KT さんを戦跡授業に参加できるものに構想するきっかけとなった。

1　院生伊達望さんの授業構想

沖縄戦実践において内容を押しつけるものにはせず、学生の思考創意を促す授業つくるため伊達望さんは沖縄戦の学習を始めた。彼女のよき相談役となったのが 97 年度最初の基地と戦跡 I・II の授業に参加し、平和ガイドを始めた 2 年次の野口一平さんであった。野口一平さんは平和ガイドをするために 98 年度の基地と戦跡 I・II の授業を再度聴講するなど極めて研究熱心であった。

伊達望さんは野口さんから沖縄戦の本を借り、本だけでなく現地を実際に見てみようと考え、山内栄（現共通教育琉球大学特色科目「基地と沖縄 I・II」講師）さんに頼んで、アブチラガマを説明していただいた。いっしょに説明を聞いたのは伊達望さん、野口さん、そして卒業論文で芋作り実践をモニターしている K さんであった。伊達望さんはこの受け身で説明を聞くというアブチラガマ体験にあきたらなかった。再度アブチラガマへ出かけた。二回目のアブチラガマ巡検は当時院生であった山口剛史さん、野口さんと共に基地と戦跡 I・II を受け、卒業後も平和ガイドを続け、県立公文書館県史の編集を手伝っていた地主園さん、そして野口さんが一緒であった。アブチラガマという現場で伊達望さんたちは授業づくりのための相談をした。

伊達望さんは相談の結果、「ガマの他にも様々な場所に行こうと考えていたが、結局場所については、先に述べたように『授業する』という固定観念があったこと[2)]」によって、アブチラガマに絞って、授業内容を絞ることに決定した。相談のポイントは伊達望さんの言う『授業する』という学生が受け身ではなく、学生が沖縄戦の「典型」を主体的に思考判断できる教材にアブチラガマはなりうるかどうかにあった。この時、いっしょに相談した山口さんは、アブチラガマは「軍民一体化」という沖縄戦の「典型」が含まれている素材であると判断したという[3)]。

伊達望さんは、当初次のような授業を考えていた。

沖縄戦当時、アブチラガマの中で砲弾の当たらない安全な場所に日本軍がいて、危険な場所に住民や重傷患者がいたという事実がある。このことは日本軍が住民を守らなかったという沖縄戦の「本質」を示すものである。そこで、日本軍と住民・重傷患者二つの立場に分けて、どの場所にそれぞれを配置すべきか、それぞれの立場にたってディベートする[4)]。

この構想の問題点は、日本軍が住民を守らなかったという沖縄戦の「本質」を教えたいという目標から出発したゆえに、日本軍が砲弾のあたらない安全地帯にいるべきであるという側に説得力のある立論をさせることが極めてむつかしいという事にある。さらに立論させることによって、国体護持のための持久戦を肯定することに学生を追いやるという懸念もある。

1998 年 6 月 9 日、授業の前日、この授業構想について、大学院の授業で吟味が行われた。吟味の中で前記のような問題点が明らかになった。吟味の結果、前記のような問題点を克服するために「軍民一体化」という沖縄戦の「典型」を考えることができるアブチラガマでおこった住民殺害事件に授業の焦点を合わせることになった。また、主体的な思考判断できる授業とするためにロールプレーという手法を用いることに決定した。ロールプレーは高嶋先生が発した一言がきっかけであった。たった 1 日で伊達望さんと野口さんは授業のためのロールプレーのための資料準備を行った。以下どのような授業が行われたのか、伊達望さんの作った授業記録からその様子を再現する[5)]。

2　バスの中でのロールプレーの準備

6 月 10 日（水曜日）アブチラガマ行きのバスに乗車

伊達望　今日は戦跡地めぐりということですが、今回は一つの場所に限定してじっくり授業したいと思います。今日行く場所は糸数壕です。今回、そこで何をするのかというと、皆さんにこの場所で起きたと言われるある事件をみなさんが再現するということをしてもらいます。みなさんは、一人一人役を与えられています。みなさん一人一人がその役になりきって演技をしてください。その時台本は渡しますが、セリフは書かれていません。それぞれが考えてセリフをしゃべってください。
（役割分担表を配布）
では役を発表します。

それと同時に役のデータを一人一人に配っていく。配られたデータは下記の通りである。

部隊長（伍長）役　MK（2 年次）
　データ
- 貴官は「糸数壕」の責任管理者として、この病院が撤退したあとの食料・衣類を管

理するために残っている。

- 壕外に出ていって、米軍の捕虜となったものはすべて米国のスパイであり、絶対に壕に近づけてはならない。もし、近づいてくるものは全て射殺せよ。軍の「生きて虜囚の辱めを受けず」という教えの通り、捕虜になることは大変恥ずべきことである。また、米軍に捕まった場合、男は全て殺され、女は敵のなぶりものになるのである。

  よって、壕内の避難民は壕外へは出さないし、出る者は射殺せねばならない[6)]。

在郷軍人分会長役　HN（4 年次）代役のため高嶋先生

データ

- わたしは、もともと地域の戦争指導者層の在郷軍人の会長[7)]であり、病院が南部に撤退した後、残った住民の責任者挌として壕内の統制を伍長と一緒にしている。
- 壕外に出ていって、米軍の捕虜となったものはすべて米国のスパイであり、絶対に壕に近づけてはならないのである。もし、近づいて来るものは全て射殺だ。軍の「生きて虜囚の辱めを受けず」という教えの通り、捕虜になることは大変恥ずべきことである。また、米軍に捕まった場合、男は全て殺され、女は敵のなぶりものになるのである。
- この間もこの壕の食料を求めに来た外からの侵入者（沖縄の民間人）がいたが、伍長の命令で射殺した。我々が死ぬか、ここへ来るものが死ぬかの戦だったのだ。

みはり（役所職員[8)]）1　（2 年次）

データ

- 私たちは病院が南部に撤退した後、食糧倉庫の見張りのためにここにいます。
- 今は私が外部からの侵入者がいないかを銃を片手に見張っています。
- 壕外に出ていって米軍の捕虜となったものはすべて米国のスパイであり、絶対に壕に近づけてはならないのです。もし近づいてくるものはすべて射殺しなければなりません。また、米軍に捕まった場合、男は全て殺され、女は敵のなぶりものになるので、壕から出て捕まることは大変恐ろしいことなのです。
- 日本軍は負けないという確信があったので、伍長のいうように外に出て米軍の捕虜になったら殺されるから出ていかない方がいい。だから伍長が「外から来たものは全てスパイだから射殺せよ」という命令に対しては何とも感じません。

みはり 2（役所職員）2　NA（4 年次）欠席のため HN（4 年次）が代役

データ

- 私たちは病院が南部に撤退した後、食糧倉庫の見張りのためにここにいます。
- 今は私が外部からの侵入者がいないかを銃を片手に見張っています。
- 壕外に出ていって米軍の捕虜となったものはすべて米国のスパイであり、絶対に壕に近づけてはならないのです。もし近づいてくるものはすべて射殺しなければなり

ません。また、米軍に捕まった場合、男は全て殺され、女は敵のなぶりものになるので、壕から出て捕まることは大変恐ろしいことなのです。

- いつか援軍が来て、わたしたちを助けてくれるものと信じています。

歩けない患者 1[9]（京都出身　62 師団）US（4 年次）、

データ

- 私は京都からこの沖縄に来て戦闘に参加して、嘉数高台の戦闘で腕を怪我してしまい、破傷風にかかり、南風原陸軍病院に運ばれました。しかしそこは人がいっぱいだったので、この南風原陸軍病院の分室である糸数壕に入ってました。病状が思わしくなく、結局病院が南部に撤退する時に残されてしまいました。
- もう少し手当してもらえれば元気になれるだろうに、取り残されたのはくやしく、周りの患者がみんなと撤退してゆくのがうらやましかった。
- しかし、その後傷が癒え始め、私はだいぶ動けるようになりました。
- 周りでは敵がこの壕に入って来ないように入り口に監視役をつけています。私も元気になれたので、みんなの役にたつために、そして敵のスパイがいつ来て攻撃してくるか分らないので、伍長の指示に従って忠実にこの役を遂行しています。

歩けない患者 2（熊本出身　独混 44 旅団）YS（2 年次）

データ

- 私は熊本で徴兵されて訓練の後に沖縄に来る途中で船が沈められて溺れそうになりました。　その後、この沖縄で戦闘に参加して、5 月 4 日の反撃で腰を怪我しました。そして、真っ直ぐ糸数分室に運ばれ、治療を受けていましたが南部への撤退命令の時はまだ歩けなかったので残されて悔しい思いをしました。
- その後、傷が大分回復し、動けるようになったので他の重傷患者の世話をしています。
- 私は「戦陣訓」の“生きて虜囚の辱めを受けず”の教えを信じていて、米軍に捕まる前に一泡ふかせてやろうと考えています。

ガマに降伏勧告を呼びかける米兵　IS（2 年次）、

データ

- わたしは、日系 2 世のアメリカ人です。戦争が始まったらすぐに強制収容所に入れられました。ここからでるために、志願してアメリカ軍にいます。
- 今、ガマの外は捕虜になった住民が殺されることもなく、平和に暮らしています。はやくこのガマから出して平和な生活に戻してあげたいです。
- でも、ガマの中から何回か狙撃されて、ちょっと警戒しています。

食糧を取りに入ってくる人（糸数住民）IK（2 年次）

データ

- 私はこの糸数の住民です。6 月に入ってから米軍の捕虜になりました。今までは、

米軍に捕まると、男は全員殺されて女はなぶりものにされるというううわさを信じていましたが、殺されることはありませんでした。一応収容所暮らしですが、食料を自由に探し回れます。

- この糸数壕には、軍の食料がたくさんあることを知っています。しかし、以前に、食料を取りに行った人たちが銃で撃たれたことも知っています。
- けれど、この壕の中にいる人たちは自分と同じ糸数の住民だし、しかも自分と顔見知りの同じ部落の人がわたしを銃撃してくることはないでしょう。

家族 1

住民の長老的存在おじー、SK（2 年次）

データ

- わしはばあさんと一緒にこの壕へ避難してきたけれども、ばあさんのことがとても心配だ。わしの子供の家族は北部にいるのだが、今、どこで何をしているんだろうか。
- 周りの者たちは、アメリカーやスパイが来ないようにして見張りをしている。わしも日本軍の伍長から「この壕に入ってくるものは皆スパイだ」と銃を手渡された。確かに外は戦闘が続いているだろうし、外は戦争が終わった。というのは疑わしい。もしも、と思うが外に出て確かめるのも危ないし、外に出ると伍長が殺すと言っているし・・・
- ここを取り仕切っているわしらの側のものも外から来る奴は殺せと言う考えらしいなあ。

住民の長老的存在おじーの妻、YN（2 年次）

データ

- わたしはおじーと一緒にこのガマへ来て 3 ヶ月以上になるが、わたしもいつどうなるかわからない年齢だし、はやくどうにかして外に出たいものだ。だけどアメリカーが外をうろついてるわけだし、外は危険だってみんなが言ってる。
- 外から入ってくる人はみんなスパイだから殺そうって言ってるけど、同じ知り合いでもやっぱりスパイなんだろうかね？
- わたしの娘家族は元気だろうかね？ それが心配だ。

家族 2

おじー　IT（3 年次）欠席

データ

- わたしはおじーと言ってもまだまだ若い方だ。息子が防衛隊で国のために戦ってるんだが、どうしているだろうか。若い者と言ってもこの家族では小さな孫をかかえた嫁だけだし、やっぱりわしもがんばらないといけないな。
- たしかに外は何が起きているかわからんが、普通米兵に捕まったら殺されると聞い

ている。恐ろしい話だ。外では米兵の投降の呼びかけがあったが、出ていったら何をされるかわからない。ましてやこの家族が目の前で悲惨な最期を遂げるのは見たくもない。

- 伍長や我々の責任者が言うには、外に居る者は知り合いであれ、スパイだということだ。このことを知らないまま、知り合いに呼びかけられて壕を出ていって、米軍に捕まっていたら・・・なんて恐ろしいことだ。

おばー　M（2 年次）欠席

データ

- わたしはおばーと言っても若い方だ。
- わたしのかわいい孫が「こわい」と言って時々泣いたりするのがかわいそうでならない。早く友軍が来て私たちを助けてくれないか。けれどいつかはそういう助けが来るんだろうかなあ。
- 最近米兵が出てきなさいと言ってきているが、私たちが出て行ったら殺されてしまうんだろうなあ。特に可愛い孫がどうなってしまうのかは想像したくない。かといって米兵の言う通り何もしないのであれば・・・けれど遠くの米兵より近くの友軍、軍の人が言っているからひどいことをされるのは本当なんだろう。

子連れのかあさん（夫が防衛隊）FK（2 年次）

データ

- この壕の生活がどのくらい経っただろう・・・夫はどうなっているのかしら・・。
- まだ小さい子が背中にいて、時々ぐずりだしてしまう。長男も「こわい」と言って怯えている。けれどこの壕の中では我慢することしかできないし・・・けれど、うちのおじーおばーは元気なほうだからまだいいかもしれない。
- この家族を守っていくためには食料が必要だし、この状態が何日続くか分からない。これを壕の外から取りに来る人たちは外は安全だからって言うけど、本当のことなんだろうか。けど、外に出るのがこわいし、伍長の命令もある。そして何より夫がお国のために戦っているんだから、私も外部からの敵に立ち向かっていこう。

こども　MM（2 年次）欠席

データ

- ぼくは今、7 歳です。
- ぼくは 3 月の終わりから外に出ていないので早く外に出て遊びたいです。
- 恐いおじちゃんたちがいて、いつも怒っています。よく泣いちゃいそうになるけどお母ちゃんが泣いちゃ駄目だっていうから我慢しています。
- ぼくはお父ちゃんが元気か。ちょっと心配です。

家族 3

おじー　OY（4 年次）

データ

- まだまだ若いもんには負けんという気力に満ちあふれ、自分がみんなを守ろうと考えている。
- 戦争は嫌いだ。命どぅ宝だ。
- 早く外に出たいけど、外に出たらアメリカが恐いので出ない。

おばー　TS（2 年次）

データ

- ウチナー口しかしゃべれないので軍人が何を言っているのかわからない。
- 息子が防衛隊に取られているので無事に帰ってくることを祈っている。
- 歌い踊るのが好き
- 本当は戦争が嫌いで軍人も嫌いだ。

お母さん（娘が学徒隊、夫が防衛隊）KJ（4 年次）

データ

- 病弱な息子を抱え、またウチナーグチしかしゃべれない母がいて大変。
- 娘が学徒隊、夫が防衛隊に取られ、家族を守る立場にある。
- 他の家族が役に立たないため一人で食糧集め、水くみなどをやっている。
- 無敵皇軍を純粋に信じている。
- 日本軍の食料を欲しいけど殺されるかもしれないので黙っている。

病人の息子　NK（2 年次）

データ

- あなたは生まれつき病弱で徴兵検査にも合格せず、家族とともに避難しています。あなたはこのことを大変恥じています。
- 村人からは「非国民」とののしられていますが、ただ一人の成年男子として村人を守り抜こうと考えています。
- 父や妹が前線で頑張っているので負けられないという気持ちがあります。

3　13 時 20 分　バスで出発

伊達望さん　これからこのロケバスはロケ地「糸数壕」に向かいます。皆さんは手元にある封筒の自分たちの役割についてのデータと地図をみながら、役のイメージをつけてもらいたいと思います。ただし、この封筒にある中身（データ）は自分だけしかみてはいけません。

では、これからロケ地に向かうまでに、配った地図にルートを通ります。このルートにあるものから、みなさんが演技する時代の背景を説明したいと思います。まずは野口さ

んに沖縄戦の概略を教えてもらおうと思います。

通常の戦跡めぐりでは、バスの中で冒頭沖縄戦の概略が語られる。この授業で、伊達望さんはロケバスという設定を行い、学生に役割を演じることのイメージ化を図っている。したがって、役を演じるという構えをもって学生が沖縄戦の概略の話を聞くことになった。

【野口さんの沖縄戦概略説明】

まず、沖縄戦の概略を話しておきたいと思います。沖縄では、昭和 19 年 3 月 22 日南西諸島防衛のための第 32 軍が設置され、本格的に戦争の準備が始まりました。続々と陸軍の精鋭部隊、みなさんの中では MK、US、YS、が満州から沖縄に上陸してくる。この中で、皆さんの多くの人が演じる糸数住民を含む中南部の住民 10 万人を九州や山原、台湾に疎開させる計画をたてたりしましたが、無敵皇軍を信じる人々は（糸数住民を含む）ちっとも疎開をしようとしませんでした[10)]。疎開希望者が増えてくるのはこれから話す 10.10 空襲からですが、その頃には沖縄周辺の航海権は米軍のもので、疎開船が無事に九州や台湾に着く保障はありませんでした。そして 10 月 10 日にはさっき話した 10.10 空襲があり、那覇の町の 90 %が焼け、また主要な軍事施設も軒並み破壊されました。

さて、昭和 20 年の 3 月 23 日から、沖縄にアメリカの大艦隊が近づき、空襲や艦砲弾の雨を降らせました。この時米軍は南部の港川に上陸するように見せる陽動作戦をやったので南部の方が被害に被害が激しかったようです。糸数住民は上の壕に隠れていました[11)]。

米軍は 3 月 26 日に慶良間諸島に上陸し、4 月 1 日には本島西海岸の読谷から北谷のハンビータウンの辺りにかけての海岸に上陸しました。上陸兵員は実戦部隊が陸軍海兵隊合わせて約 18 万 4 千人、支援部隊を含めると約 54 万 8 千人で、その辺りには日本軍がほとんどいなかったので、その日の内に北飛行場と中飛行場、現在の読谷補助飛行場と嘉手納空軍基地を占領しました。そして 3 日には占領地が東海岸に到達し、ここから米軍は南北に分かれて沖縄本島全体の占領を目指します。

それに対して日本軍は正規軍が約 8 万 4 千人、現地召集した補充兵、防衛隊、学徒隊等を合わせて約 11 万の兵力で首里城地下に置かれた第 32 軍司令部を守るように何重もの防御陣地を築いていました。この戦力は埋めるために、日本軍は「一人十殺一戦車」[12)]を合い言葉としました。北側の第一防御ラインは宜野湾コンベンションセンター辺りから嘉数、我如古、千原、南上原を経てニューマンの辺りに至るラインで、この中には今の琉球大学の敷地も含まれています。そして第 2 防御ラインは牧港から伊祖、浦添城跡、前田、西原の幸地を経て坂田、小那覇へとぬけるラインです。小那覇というのはだいたい私たちの芋畑のある辺りだと思ってけっこうです。

日本軍は初め、米軍の陽動作戦にひっかかって主力を喜屋武半島、知念半島に配備していました。そのため実際に北側の防御陣地には第 62 師団（藤岡中将）1 万 4 千人がいただけでした。それに対して 3 個師団約 6 万人の米軍が日本軍の第一防御ラインに到達したのが 4 月 8 日です。はじめは米軍の遊撃速度に補給がついてきていなかったため、日本軍の方が有利でしたが、米軍の補給部隊が追いついた 19 日からの総攻撃による兵士の消耗がはげしく、日本軍は 23 日の夜には第二防御ラインに撤退しました。US さんの役である京都出身 62 師団の兵士が負傷したのもこの戦闘によるものでした。
第 2 防御ラインでは 25 日から戦闘が始まりました。激しい戦闘の中で長勇参謀長の発案で 5 月 3 日から日本軍の総攻撃がありましたが 5 日までにかなりの損害を出して失敗に終わりました。YS さんが演じる独立混成 44 旅団の兵士はここで負傷しました。米軍は第 2 防御ラインを突破し、首里の日本軍司令部を囲むように東側は運玉森から与那原南風原へ、西側は安謝から天久、安里を経て国場方面へと進み、中央部は石嶺丘陵を越えて首里城へと進みました。19 日には西側で天久が落ち、21 日には運玉森の東側を米軍が占領し、与那原方面へ進めるようになったため首里が孤立する危険性が強くなりました。そこで 21 日の夜、第 32 軍司令官牛島中将は参謀会議を開き、矢原高級参謀の主張する「南部へ撤退して長期持久をはかる」方針を決定し、22 日から 28 日にかけて全部隊が南部へ撤退しました。

この語りの終わるころ南風原兼城十字路にかかったので、N さんは南風原陸軍病院を説明した。説明後再び渡した資料を熟読してもらったという。

4　14 時 20 分　ロケ地（糸数壕）に到着

糸数壕に到着、壕の立て札の前で、伊達望さんは下記のような壕の簡単な歴史を説明した。

糸数アブチラガマは、1945 年 2 月独立混成第 44 旅団歩兵第 15 連隊、通称：美田連隊が陣地壕として整備した。美田連隊は 4 月の下旬首里戦線へ移動していった。その後、南風原陸軍病院の分室が開設され、5 月下旬まで、連日運ばれてくる傷病兵の治療・看護をした。ひめゆり学徒隊が傷病兵の看護をしていた場所でもある。このガマは、はじめは陣地だったが糸数の住民が避難する場ともなり、その後は住民の避難の場と病院が混ざった状態となる。6 月以降は、食糧の見張り番となった日本兵と地元住民がガマで生活を始める。壕の中では「外から来た者はスパイ」「外に出たら殺される」といわれ、兵隊の指揮の下、住民たちも壕の見張りをまかされていた。そんなおり、捕虜になって自由な生活をしていた糸数住民が食糧を取りにこの壕に入り、見張りをしていた糸数住民に殺害されてしまったという事件がおこった。

伊達望さんはその後学生たちを実際にアブチラガマの中に入れ、必要な部分だけを説明し、最後に事件のあった場所で、すなわち北側入り口付近へ行き、事件の概要を、下記の簡単な台本をもとに説明した。

【台本】

台本といっても、個人個人のセリフはありません。
だいたいこういうような流れで進めるというだけのものです。
すべて、あなた達で振りやセリフを考えて進めてください。

1. 最初に、ガマの中へ米兵が降伏勧告を呼びかける。
2. 呼びかけたとき、ガマの中はどういう態度をとるか？ →拒絶する。
3. （その後、2 回ほど外から来た民間人が壕の食料を取りに来たが射殺した。）しかし、この日食料を取りにきたのは同じ糸数の住民だった。食料を取りにきた役が呼びかける。
4. その時どういうことになるのかというと、結局食料を取りにきた住民を射殺してしまいます。この時のシーンはいろいろな人のセリフを混ぜてみて、考えてみましょう。

その後、壕を出て一旦バスの中に戻り、射殺事件の流れを確認した。それから各自のセリフを考え、一回流しでセリフ合わせを次のように行った。

5　セリフ合わせ

（伊達望：「はい、スタート！」）

降伏勧告する米兵（以下米兵役 IS）　ミナサーン、戦争ハ　オワリマシタ、ハヤクデテキナサーイ

家族 3 のおばー (以下おばー 3 役 TS)　ちゃーすがやー、おじー、でーじよー、早く出よう。

家族 3 のおじー（以下おじー 3 役 OY）　とにかくわしも早くでたいんじゃ。

家族 1 のおばー（以下おばー 1 役 TN）　おじー、どうするねー。アメリカーあんな言っているよ。

住民の長老的おじー（以下家族 1 おじー役 SK）　アメリカーの言うことだから戦争が終わったちゅう話も信じられんしのう。まだ出るのは危険かもしれんなあ。

家族 3 のお母さん（以下家族 3 おかー役 KJ）　出たらだめだよ。ここにいる日本軍の人たちのことが正しいんだよ。

家族 3 の病人の息子（以下家族 3 息子役 NK）　俺行こうかな（聞き取れない）

家族 2 のお母さん（以下、家族 2 母 FK）　戦争終わってないよ。うちのだんな帰って来ない

もん。まだ終わってない。

(住民側の意見が終わりしばしば沈黙・・・次は軍側の役の人の番だと告げ、呼びかけに対してどうするかということではじめてもらう。誰からしゃべるかしばし戸惑う)

部隊長《伍長》〈以下、伍長役 MK〉　だめだ、きさまら、馬鹿なことを考えるんじゃない。戦陣訓を忘れたのか。外にアメリカがうろうろしているって事はまだ戦争は終わっていない。戦争が終わったときは、アメリカ軍は皆殺しに終わっているはずだ。」

(「では、傷病兵はどうしゃべるか？」という伊達望と高嶋先生の声に対して、US・YS は悩んでいる様子だった。US・YS「歩けないのにどうしたらいいんでしょうか？」と反問してきた。
　そこで、大分治ってきているという設定に変えた。その上で「あっち（住民）のファミリーに入ってもいいの？」・・・「伍長の命令に従って忠実だから、軍人魂に忠実ですよ」・・・「どう意見しよう？」・・・考えはじめる。)
(セリフ合わせを再開する)
(伊達望：「じゃあ、見張りはどうするの？」)

みはり 2《役所職員》(以下みはり 2 役 NN)　バンバーン！ (銃声) おまえら、アメリカあっちへ行け

(このセリフの後、米兵は「知らないからな」と捨てぜりふを言うことにする。)
※ここで 1 シーン終了。次の場面のセリフ合わせを始める。
(伊達望：「はい、スタート！」)

食料を取りに入ってくる糸数住民（以下住民役 IK とする。）　ちゃーびらさい。おじーどこいるねー？　この食料持って外出よう。戦争終わっているよ。壕の中より外の方がいい暮らしできるし、りっかーりっかー
おばー 1 役 TN　あの声は豆腐屋の K やっさー
おばー 3 役 TS　ちゃすがやーおじー　豆腐屋の K(聞き取れない)
おじー 3 役 OY　あんなこと言ってんだから、出よう出よう
家族 3 息子役 NK　あれは米兵のスパイになってるかも
家族 3 おかー役 KJ　そうだよ、みんなアメリカに騙されている
家族 2 母 FK　そうだよ。そうだよ。
家族 1 おじー役 SK　まだよくわからんな、とりあえずちょっと軍人さんのところ見てから待ってみようか

(伊達望　軍人にふられましたが、軍人はどうする？)

在郷軍人分会長（以下在郷軍人役高嶋）　たしかに聞いた声だけど、でも一度は外に出た人間

はアメリカに手なずけられたに決まっているから、彼の言葉は信じるわけにはいかんよなあ

(在郷軍人役高嶋が伍長役 MK にふった。)

伍長役 MK　そうだ高嶋さんの言うとおりだ

(このセリフについて、高嶋先生が「そっちの方が上位なんだから、『そうに決まっている！』とかなんとかね」『やっぱり助けるわけにはいかんだろう』と伍長役 MK の立場を強化した。)

伍長役 MK　敵の密偵に決まっている。

在郷軍人役高嶋　これは見逃すわけには行かないから、同じように殺すしかないだろう。

みはり 1《役所職員》(以下みはり 1 役 KT)　ちょっと待ってくれ！ 俺の父ちゃんを殺さないでくれ

(いきなりの展開に全員が笑う。「そういう話になっているんだよ」「無理やりに話を変えてきた」という意見に対して、みはり 1 役 KT は住民役 IK が父ちゃんという設定にしたいと主張した。)

みはり 1 役 KT　父ちゃん今ちょっと動揺しているだけだよ。わからん

(そういう設定にするならとみはり 2 役 NN はみはり 1 役 KT を押さえ込む)

みはり 1 役 KT　なあ、お兄ちゃん、待ってくれ。俺の父ちゃんを殺さないで

(このみはり 1 役 KT のセリフに対して住民に対してどうするか問いかけた。)

高嶋先生がここで「前に殺した二人だって家族・兄弟がいたんだし・・・でもね」と言って、結局話合いの結果、みはり 1 役 KT のセリフの後、もうひとりのとみはり 2 役 NN によって父ちゃん＝入ってくる住民が殺される設定になった。

みはり 1 役 KT の父ちゃんは住民役 IK という設定を認められた KT は喜んでいた。

高嶋先生はこの時、次のように語った。

KT の問題提起は、よく知っている同じ村の人、そして家族をもなぜここで殺さなければならないのだろうか。をよく考えてみよう。ということだ。

日本軍はどういう論理で人を殺したのだろうか？ 住民はどういう論理で殺すことを黙認したのだろうか。

日本軍は　ここで住民役 IK を見逃したら、アメリカのスパイとしてここの状況をアメリカに伝えてみんな殺されることになるんだから、というような理屈を言うかもしれないね。そこで、住民たちは「ここはがまんするしかない、あっちへ行ってろ」というような声をあげるかもしれない。もしくは重いことなので沈黙するかもしれないね。

結局かわいそうだが殺すしかないということになり、みはり 2 役 NN が伍長役 MK の

命令で殺すことになるのかな？」

ここで野口さんがさらに次のようなアドバイスをした。

「スパイ」を殺すことが、国への忠誠を示す証のような雰囲気がアブチラガマの中にはあったのじゃないかな。

この野口さんの言葉でセリフ合わせが一応は終わったが、まだガマの中には見学者がたくさんいたので、人がいなくなるまで、日本軍側と住民側で打ち合わせが行われた。

住民側のまとめ役は 4 年の KJ さんが行い、伊達望さんと連絡をとって進めた。

6　15 時 40 分本番開始

（下線は打ち合わせ後新しく作ったセリフ、見えけしは打ち合わせ後削除されたセリフ）

（伊達望：「はい、スタート！」）

米兵役 IS　ミナサーン、戦争ハオワリマシタ、壕ノ外ハ食料モタクサンアルシ、平和ナ生活が保障サレテイマス、ハヤクデテキナサーイ

おばー 3 役 TS　ありー、ちゃーすがやー、おじー、~~でーじよー、早く出よう~~。

おじー 3 役 OY　あんぜよー　~~とにかくわしも早くでたいんじゃ~~。

以下おばー 1 役 TN　おじー、どうするねー。アメリカーあんな言っているよ。

家族 1 おじー役 SK　~~アメリカーの言うことだから~~まあ戦争が終わったって話も信用できんしなあ。~~まだ出るのは危険かもしれんなあ~~。今のとこは様子見てみようか。

以下家族 3 おかー役 KJ　だめだよ。みんな日本軍兵の方が正しいんだよ。あれなんか騙されているんだよ

家族 3 息子役 NK　~~俺行こうかな~~　本当かな、怪しいよ

家族 2 母 FK　ううん　戦争終わってないよ。だってうちのだんな帰って来ないもん。~~まだ終わってない~~。

歩けない患者 2（以下患者 2 役 YS）　静まれ、伍長から一言ある

伍長役 MK　~~だめだ~~、騙されるな。きさまら、馬鹿なことを考えるんじゃない。戦陣訓を忘れたのか。生きて虜囚の辱めを受けずだ、戦争はまだ終わっちゃいない！ 次にそんな言葉を吐くやつは射殺だ。~~外にアメリカがうろうろしているって事はまだ戦争は終わっていない。戦争が終わったときは、アメリカ軍は皆殺しに終わっているはずだ。~~」

在郷軍人役高嶋　でも、われわれ軍人もこれまでの戦争はその精神でがんばってきたんだ。今更アメリカの手先になったものの言うことなんか聞いてはいかんのだよ

患者 2 役 YS　では、伍長。あの米兵をどういたしますか？

米兵役 IS　早ク出テキナサーイ
伍長役 MK　あんな奴は追い返せ！
みはり 2 役 NN　アメリカー、やったーたっくるさんどー
米兵役 IS　ナニスルンデスカ
みはり 2 役 NN　早くあっちへ行け　バンバーン！ (銃声)
米兵役 IS　知ランカラヨ

ここで 1 シーン終了
次の場面開始
(伊達望：「はい、スタート！」)

住民役 IK　ちゃーびらさい。おじーどこいるねー？　この食料持って外出よう。戦争終わっているよ。壕の中より外の方がいい暮らしできるし、りっかーりっかー？
おばー 1 役 TN　えー　あの声は豆腐屋の K やんにー
おばー 3 役 TS　ちゃすがやーおじー　あれ (聞き取れない)、早く出よう
おじー 3 役 OY　あんなこと言ってんだから、早く出よう
家族 3 息子役 NK　でも米兵のスパイになってるかもわからん
家族 3 おかー役 KJ　そうだよ騙されているよ、みんなアメリカに騙されているんだよ
家族 2 母 FK　そうだよ。そうだよ。行っちゃだめだよ、みんな
おばー 1 役 TN　ううん、あの子はあんな子じゃないよ
家族 1 おじー役 SK　~~まだよくわからんな~~、だーちょっと待ってとって、~~とりあえずちょっと軍人さんのところ見てから待ってみようか~~、今ちょっと様子みてみようさー。まだちょっと危ないしねー。いいねー？ みんな
みはり 1 役 KT　豆腐やの K・・・父ちゃん（K に向かっていく）父ちゃん
患者 2 役 YS　あっ！ こら、貴様！
(患者 1 役 US 患者 2 役 YS がみはり 1 役 KT を捕まえに行き羽交い締めにする。)
みはり 1 役 KT　あっ、父ちゃん・・・父ちゃん！
（みはり 1 役 KT が後ろに引き戻される）
在郷軍人役高嶋　うーん、うちの村の者ということでは気持ちもわからんではないけど、今までに射殺した二人だって家族がいたんだし、外に出てアメリカのスパイになったということでは同じなんだからなあ。
みはり 1 役 KT　父ちゃんはちょっと病気なんですよ。病気
患者 2 役 YS　だまれだまれ
伍長役 MK　二等兵連れて行け
患者 1 役 US 患者 2 役 YS　はい！

（さらにみはり１役 KT を後ろに連れて行く）

（住民ざわざわ）

不明　殺したらだめよー

家族３おかー役 KJ　殺したらだめよー、殺すなー

家族１おじー役 SK　軍人さん、ちょっと待ってくれんかねー？

伍長役 MK　そうだなあ、みんなも騙されそうだし、よし、殺せ！

(みはり２役 NN が入ってくる住民に向かっていく)

住民側は次々に声をあげる

住民側　殺せって！　待ってよ！　許して！

みはり１役 KT　父ちゃん、逃げて！ 父ちゃん！ 父ちゃん逃げろ！

みはり２役 NN　バーンバーンバーン (銃声)

住民側　あーっ

(入ってくる住民役 IK 撃たれて屈む)

7　アブチラロールプレー実践の意味

本実践におけるロールプレーに関する準備はわずか１日しかなかった。その１日で野口さんは、この授業に参加する学生すべてに対する役割分担データを準備した。伍長役や在郷軍人会分会長、役所職員など、アブチラガマにおいて主要な役割を果たしたものは、1998 年段階の研究水準である石原昌家『虐殺の島』（1978 年）や玉城村役場が発行した『糸数アブチラガマ』（1995 年）に依拠して構成したという。また、歩けない患者や住民は沖縄戦下において実際にいた蓋然性が高い人物を想定してつくっている。したがって、特定のモデルがいるわけではない。短時間なのによく準備できたものであると評価したい。

ただ、ロールプレー実践では、住民を射殺したのは役所職員である見張り役二人として設定されている。この設定は『虐殺の島』17 頁の記述「知念、玉城、具志頭一帯に次のようなうわさがある。・・・(中略)・・・その壕の見張り番をしていた役所職員二人が、同じ部落の住民を米軍のスパイだと思って射殺してしまった。」というううわさを反映したものである。また、同じ『虐殺の島』には下記のような記述もある[13)]。

> 住民は男も女も各自鉄砲を渡された。つまり、地下の「アブチラガマ」に軍民一体化した軍国日本の小宇宙が編成されたのである。Ｂ地区の出入り口附近には、二四時間銃を持った監視人が二人ずつ交替で壕内から外の方を見張った。敗残兵が数名まぎれこんできたが、かれらも児島伍長の指揮下に入った。すっかり元気を取り戻した日比野傷病兵も、自ら監視する役目を引き受けて、まだ治り切らない腕をかばいながら、銃をもって、A さん (役所職員・) としばしば見張りについた。

役所職員はもちろん、住民・傷病兵も全員が鉄砲を持ち、見張りについていたという記述である。この壕で射殺された住民は三人である[14]。一人は仲村渠部落のCさん（当時20歳）、二人目は当山部落のOさん（当時40歳）、三人目は同じ糸数部落のBさん（当時50歳）である。うわさにあるように見張り番をしていた役所職員二人が住民を射殺してしまったのかもしれないが、役所職員以外の住民が射殺しなかったともいいきれないのである。本実践におけるロールプレーでは役所職員が住民を射殺するという台本を作ってしまったゆえに、住民が射殺実行者を演じなければならない点を除外してしまった点は留意しておく必要がある。

本実践のキーパスンはKTさんである。彼はガマ体験を嫌悪した学生であり、割り振られた住民を殺害する役割を忌避した学生でもある。セリフ合わせにおいて、KTさんが忌避を表明するまで、他の学生はたんたんと自分の振られた役割を演じていた。

KTさんは射殺しなければならない加害の役割を振られた。唯一KTさん一人だけが射殺実行者を演じることを迫られたことになったのである。KTさんは、自分が射殺実行者にならないため、ガマにやってきた住民は自分の父であるという戦時下でも通じるであろう「孝」という論理で対抗しようとした。

高嶋先生はここでKTさんの創造した役割を認める。認めた上で殺害を具体的には迫られていなかった学生たち全員に「よく知っている同じ村の人、そして家族をもなぜここで殺さなければならないのだろうか。日本軍はどういう論理で人を殺したのだろうか？ 住民はどういう論理で殺すことを黙認したのだろうか。」ということ形でKTさんと同じ立場に学生を追い込んだのである。

石原は「『アブチラガマ』での住民虐殺の直接の下手人を追求することはたいして意味がない。なぜなら、その日の見張り当番に当たったひとはだれしも下手人たりえたのである。ただし、その洞窟内の籠城、住民殺害は日本兵の指揮下におかれたからこそ軍国主義思想は増幅され、軍民一体となって住民をスパイ視して虐殺する事件が発生したのではなかろうか。」と述べる[15]。

高嶋先生が追い込んだKTと同じ立場に追い込まれた学生、特に住民役の学生たちは、住民を「殺したらだめだよ。」と、意外にもセリフ合わせとは全く異なる事を言い出す。このことはKTさんの影響を受けたことはまちがいない。それとともに、日本軍が作り出した理不尽な世界だったから虐殺を黙認せざるをえなかった住民の口惜しさや、住民が住民を殺させる軍国主義思想のおぞましさを住民役として実感した結果「殺したらだめよ。」と叫びたくなったのだともいえよう。

一見、「殺したらだめよ。」というセリフは非歴史的なセリフのようにみえる。しかし、アブチラガマでスパイ容疑で捕まり縛られていたHさんが誰かによって逃がされたり[16]、スパイ事件の頃から壕から密かに脱出する住民が増え始めたり[17]など日本軍に対する消極的な抵抗は事実として確認できるのである。

以上見てきたように、戦跡見学におけるロールプレーは学習者を当時置かれたものの立場に

立たせ思考せざるを得ない立場に追い込む点において有効な手法であるといえよう。

注

1) 夏期休暇（当時 7・8 月）中に竹富町の島々に学生を派遣して副読本改訂のための調査を行った。調査は竹富町教育委員会および八重山教育事務所の協力を得て行われ、本部を西表島に置き、本部には高嶋先生が常駐され全体を統括された。里井は当時附属中学校教諭だった玉寄義治先生、斉藤美喜夫先生とともに離島を巡って学生を指導した。1997 年 3 月、当時琉球大学教育学部社会科学科の研究生だった山口剛史（現琉球大学島嶼文化コース准教授）さんが、副読本改訂版を編集し、竹富町教育委員会に 100 部を寄贈し、竹富町の各島々の小学校に配布された。

2) 伊達望「イモ実践の授業を通して」(1998 年度琉球大学教育学部社会科教育ゼミ社会科教育論集『うりずん』、1999 年 3 月、90 ページ)。

3)2008 年 2 月 20 日、山口剛史さんに確認

4) 伊達望「イモ実践の授業を通して」(『うりずん』、90 ページ)。

5) 伊達望「イモ実践の授業を通して」(『うりずん』、91〜112 ページ)。

6) 石原昌家『虐殺の島』31 ページ、(晩聲社、1978 年)

7) 当時糸数の在郷軍人会の分会長で、戦後村会議員であった A さんをモデルにしている（石原昌家『虐殺の島』17、30 ページ、(晩聲社、1978 年))。

8) みはり 1・2 は戦時中玉城村役所兵事主任で艦砲で負傷し、戦後助役を勤めた T・S さんをモデルとしている（石原昌家『虐殺の島』17〜8、29、31、34 ページ、晩聲社、1978 年)。

9) 日本軍が 5 月 19 日からの総攻撃で負傷した 62 師団の兵士をイメージした。

10) 糸数村（糸数 1 区）539 人中本土疎開 34 人、山原疎開 5 人、計 39 人（『玉城村史　第六巻　戦時記録編』169 頁)。学童疎開は 27 人大分県、一般疎開は 7 人で熊本県南小国村黒川へ疎開した（『玉城村史　第六巻　戦時記録編』651 頁)。

11) 玉城村『糸数アブチラガマ』1995 年、9 頁)、最も大きいアブチラガマ主要部と出口奥の大きなガマは軍が使用し立ち入り禁止区域であった。住民はアブチラガマ出口周辺の小さなガマに避難していたという（『玉城村史　第六巻　戦時記録編』653 頁)。

12)『沖縄新報』四五年一月二七日　32 軍参謀長長勇の言葉

13)『虐殺の島』31 頁

14)『虐殺の島』32-33 頁

15)『虐殺の島』51 頁

16)『虐殺の島』38 頁

17)『玉城村史　第六巻　戦時記録』143 頁　第四章戦場となった村　吉浜忍執筆部分